



BSR 通信

BSR 推進室ニュースレター第 12 号

平成 27 年 3 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室

〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1

03-5394-3079（直通）

bsr_lab@mail.tais.ac.jp

大学、仏教、そして地域

大正大学人間学部教育人間学科

教授 弓山 達也

目次

- 1 頁 : 巻頭言
 - 2~3 頁 : 研究ノート
 - 4 頁 : BSR トピックス・今後の予定
- ※BSR 図書室はお休みさせていただきます

本学で地域社会と関わって 10 年になる。2005 年に NCC（ネクストコミュニティコース）という、後に副専攻になる部署を担当し、地域連携・社会貢献に関する教育活動に携わってきた。2010 年から 2 年半、大正さろんという大学が支援する NPO 法人が運営するコミュニティスペースに学生・院生とともに週 1 日だが、常駐して近隣のご用聞きのようなことをさせていただいたこともある。

活動の中で仏教系大学だからといって、特に仏教を意識したことはないが、逆に自分が仏教系大学にいるのだと意識させられたことは多い。例えば近隣の方と話していると「仏教の大学なんだから」と教理について質問を

受けたり、また仏教講座開催の要望をいただいたりした。大正さろんで行った花まつりには多くの方がお見えになった。ここから発展して、にぎり仏や仏像彫刻のサークルが院生と地域の皆さんで運営されていった。

こうした催し物に集う方々は仏教信者なのだろうか。たぶんどこかの檀家さんではあるが、明確な寺院帰属意識を持っている訳ではないようだ。大学のカルチャー講座に行き、お坊さんの話を聞くのは好きだが、特に宗派にこだわりはない。

宗教学者の柳川啓一は日本人の宗教の特徴を、神や仏に関心はあるものの信仰には収斂しない「信仰なき宗教」と呼んだ。仏教系大学として

本学は、こうした広汎な層に応える地域のセンターとしての役割があるのだろう。

もちろん「信仰なき宗教」にネガティブな意味はない。被災地と宗教との関係で聞き取り調査を行っている「仮設（住宅）から最後の一人が出ていくまでここにいる」といった専従ボランティアの話をよく聞く。当然、どこかの信者さんだと思って尋ねたら無信仰だという。信仰者、宗教に関心を持つ者、無信仰であるものの利他的精神の担い手の違いは少なく、根底にあるのは「祈り」だろうか。

かかる祈りをカタチにするのも仏教系大学が地域に出て行く時の使命の一つかもしれない。

研究ノート

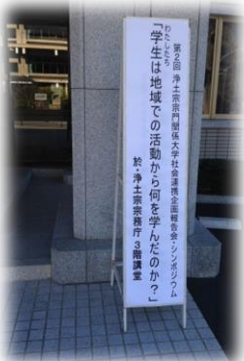
シンポジウム参加報告

今号では、最近、BSR 推進室研究員が参加したシンポジウム・研修会の報告をいたします。

学生による地域活性化

2 月 16 日、浄土宗宗務庁（京都）の講堂において、第 2 回浄土宗宗門関係大学社会連携企画報告会・シンポジウム「学生（わたしたち）は地域での活動から何を学んだのか？」が開催されました。

京都には、京都文教大学、京都文教短期大学、京都華頂大学、華頂短期大学、佛教大学という、浄土宗関係大学があります。各大学では、それぞれ地域連携・社会貢献にとりこんでおり、学生たちがどのような活



動をしているのか、学生自らが発表者となって、報告をしてくれました。

ここでは、京都華頂大学・華頂短期大学の「東山区地域活性化・学生プロジェクト」を例にあげてみましょう。

華頂大が位置する京都市東山区には「東山の未来」区民会議という、住民参加のミーティングがあります。学識経験者、地区の自治連合会、社協や民生委員などの団体代表と並んで区民公募委員があり、学生が

委員として参加して、学生目線で学生ならではの意見を発表しているということです。東山区役所ロビーで開催される「まちづくりカフェ@東山」への参加、区民新聞の企画・執筆など行政との協働が積極的に行われているようです。



また、大学の至近にある古川町商店街の活性化（清掃、空店舗活用授業、祭りへの協力など）や白川の清掃ボランティア、消防活動など、地域社会との連携、地域貢献が展開されていることも報告されました。発表は「私たちは未熟です。でも柔軟な発想ができます！」と締めくくられました。学生が街づくりに関わる際の大切な視点といえるでしょう。

どの大学も学生がチームとして発表を行ったのですが、緊張したなかにも、日ごろの活動を楽しんでいる躍動感が伝わってきました。

学生による報告の後には、各大学の担当教員によるシンポジウムに。

どの大学も地域連携に力を入れて取り組んでいることが話されましたが、一方で、「どうしたら学生に主体的に関わってもらえるようになるか」、「仏教系大学ならではの特色はどこにあるのか」といった課題は、どの大学も

共通して抱えていることも明らかになりました。

自殺対策のなかで寺院は？

続いては 2 月 18 日に東京・大手町で開催された内閣府自殺対策推進室主催の「自殺対策連携人材養成研修」の報告です。

本研修の目的は「自殺総合対策大綱に掲げられている推進体制『国、地方公共団体、関係団体、民間団体等が連携・協働するための仕組み』の具体化を図るため、自殺対策に関わる地方公共団体、関係団体及び、民間団体等を対象とした研修を通じ、地域における連携の強化を図る。」というもの。各地の自治体の自殺対策担当者や保健師、民間団体としてはいのちの電話などの相談機関のほか、理容業組合などの参加もあり、全国から 120 名を超す参加がありました。

午前は自治体と民間団体の連携を考えるグループワークが行なわれました。6 名のグループが 20 グループほどつくれ、各グループに架空の自治体の資料が配られます。資料は、その自治体の年間の自殺者数、年代別自殺率、医療・相談機関の数などが書かれたもの、自殺者の年代・要因・未遂歴のリスト、エリア内の医療機関・相談機関・自殺発生地が描かれた地図など。架空の自治体は 4 パターンあり、大都市や高齢化が進む地域、自殺の名所を抱える自治体など、具体的かつ精巧につくられています。そして、この資料をもとに、当該地域で最もターゲットとすべき層はなにか、何が課題か、そして、そこに

働きかける有効な方策は何かを、グループで見出していくという実践的なワークになります。

私が参加したグループは高齢者の自殺率が高い、高齢化のすすむ地域の設定でした。グループメンバーは、埼玉、茨城、新潟の自治体関係者、熊本の民間団体の方から構成されていましたが、自治体関係者はいかに医療につなげるかというところに重点を置きがちで、民間の視点は高齢者にどうしたら生き甲斐を持ってもらえるかという方に比重があり、官民の意識するポイントの違いが感じられました。また、私がいたこともあって、高齢者には寺院が集う拠点となりえるのではないか、という意見も出されました。

午後は雅子妃の主治医でも知られる精神科医・大野裕氏による「認知行動療法をベースにした面接の実践」のレクチャーが行なわれました。

認知（ものの受け取り方や考え方）というものは、ストレスの強い状況下では悲観的・極端になりがちな傾向（認知のゆがみと言います）があります。認知がゆがむことによって、自分はダメだと思ったり、不安が強くなる。それが、さらなるゆがみを生むという負のスパイラルが自殺というゴールにつながってしまう。そのゆがみをバランス良くしていくものが認知療法といわれています。

たとえば、「私は～すべき」という意識は、規範意識や自律を生む面がありますが、極端になってしまうと、そこに達しない・できない自分を強く否定してしまいます。そうした思考を軌道修正していくわけです。しかし、逆に

「私は～できなくてもいい」という意識がいかかといえ、これも極端になれば、だらしがない自堕落な生活を生み出します。いずれにせよ、極端な思考を修正し、しなやかに現実を受け入れて生きていけるようにするのが認知療法。レクチャーをうけながら、これは仏教のことを言っているのではないかと思うほど、共通性を感じました。

現在は寺院・僧侶が悩んだ時の相談先とは思われていない状況ですが、認知療法や森田療法など仏教と近似した療養は僧侶にはなじみやすく、学びやすいのではないのでしょうか。

若手僧侶がえがく未来の仏教

最後は2月23日に東京・増上寺で開催されました、浄土宗総合研究所シンポジウム「今考える未来の仏教 一次世代を担う立場から」です。未来の仏教とは壮大なテーマですが、企画意図はこうです。「未来の僧侶は、寺院は、仏教は、どうなっているのだろう。本シンポジウムではそれを考えるため各方面で活動する若手僧侶が、それぞれの理想を語り、そこに到達するための今を語る。それぞれ



が目指す理想は異なり、現在の活動も異なるが、話題が重なり合うことで未来の仏教を照らしだすだろう。」

パネリストは、井上広法氏（hasunoha 共同代表）、大河

内大博氏（上智大学グリーンケア研究所研究員）、掬池友絢氏（寺子屋ブッダ講師）、和田典善氏（大正大学非常勤講師）という30代、40代の浄土宗僧侶。テレビ番組「ぶっちゃけ寺」のレギュラー僧侶、病床訪問（ターミナルケア）や遺族ケア（グリーンケア）をする僧侶、お寺でイベントや都会のOLとのお茶会を開く女性僧侶、お寺の檀家制度を時代に適応させようと模索する僧侶です。

各発表からは、それぞれの活動がどれも行き当たりばったりの思いつきではなく、しっかりと方向性を考えた上での活動であり、なおかつ、そのなかで、自身の仏教観、寺院観を鍛えている様子が伝わってくるものでした。

パネルディスカッションでは、やや寺院経営についての議論に偏った感がありましたが、若手僧侶が堂々と自身の経験をふまえた発言をしていたのが印象的でした。特に心に強く響いたのは、最後に「30年後の仏教はどうなっているでしょう」という問いに、ターミナルケアにたずさわっているパネリストが答えた、「今日の前にあることに精いっぱい、30年後のことまで考えられません」という言葉でした。お釈迦様は「過去をおうな、未来を願うな。ただ今なすべきことを専念してなせ」とおっしゃっていますが、まさにそういうことなのだとハッとさせられました。若手僧侶が、今、目の前にある課題、なすべきことをひたすらに一生懸命につとめること。おそらく、その先におのずと「未来の仏教」が明るく輝いてくることでしょう。（O）

BSR トピックス

区民ひろばで出張仏教講座！

現在、大正大学では地域との連携を積極的に進めております。特に豊島区とは親密な連携をとっており、区長や区役所の部課長が交代で講義を担当する「豊島学」を開講しています。

以前紹介したとおり、その地域連携活動の一環として昨年 12 月から始まったのが、区民ひろばく清和第一→主催の特別出張講座「仏教に親しむ」です。

第 1 回では、「仏教の基礎知識」（講師＝高瀬頭功研究員）と題して、お釈迦さまの生涯をたどって仏教の基本的な考え方をお話しました。続いて去る 1 月 21 日に第 2 回講座「仏事のいろは」（講師＝小川有閑研究員）、第 3 回「超簡単！瞑想法」（講師＝間正晃也事務主幹）が開講されました。

「仏事のいろは」では、葬儀、法事、お盆、お彼岸、お墓など仏事について、具体的な事例を上げ、そこに込められた意味、役割について詳細な説明がなされました。集まった 30 名弱の方は、ご自身の経験と重ね合



わせながら聴いていました。経験したことのある方はなるほどこんな意味があるのかと頷きながら、経験のない方は、こんな時はそうするのかといった具合に非常に関心のあるテーマであることが見てとれました。

「超簡単！瞑想法」では、お釈迦さまの生涯から仏教で瞑想を重視していることを説明し、その後「数息観」と「月輪観」を修しました。

講義の後には、活発な質疑応答がなされ、仏教についての関心の高さが伺い知れました。そうした地域の人々のニーズに応えることも BSR（仏教者の社会的責任）の一つであると捉えての取り組みです。

次は最終回となり、3 月 12 日（木）に「実践！写経」を開催します。

また、来年度は近隣の区民ひろばく西巣鴨第一→でも同様の講座を行いたいと考えています。（M）

今後の予定

3 月 11 日（水）	14 時 30 分～	東日本大震災 物故者追悼・復興祈願法会 鴨台観音堂
12 日（木）	13 時 30 分～	区民ひろばく清和第一→ 特別出張講座 仏教に親しむ【写経】 区民ひろばく清和第一→
16 日（月）		大正大学 学位授与式
21 日（土）	11 時～12 時	花会式 鴨台観音堂前
		春休み特別企画＜親子で学ぶ鉢植え講座＞
	9 時～12 時	あさ市
	12 時～13 時	エスパス【空】 ギャラリートーク

